

コロナ禍で思う宮沢賢治(4) 芥川龍之介とスペイン風邪(後編)

京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘

1918年の夏ころから感染が拡大したスペイン風邪は年末にはかなり収まり感染者数が減りましたが、翌年の1919年の2月ころから再び感染が拡大しました。このころ宮沢賢治は東京で、スペイン風邪に感染した妹トシを病院で看病をしつつ、図書館へ通い勉強し、石材などの販売を準備したり交渉したりして、将来の方向を考えていました。父政次郎に東京で新しい仕事を始めたいとしばしば手紙を送っていますが、父は危惧し良い返事はもらえなかったようです。

賢治はスペイン風邪が流行する少し前の1918年6月に岩手病院で結核のはじまりを示す肋膜炎を発症していると診断されましたが、スペイン風邪が蔓延している東京であちこちへ出かけましたが、不思議なことに感染を免れています。よほど感染の予防対策を厳格にしていたと考えられます。

トシの病気はしだいに快復して、2月下旬には退院できるようになりました。花巻から母イチと叔母ヤスが迎えに来て、賢治を含めて全員で花巻に帰りました。トシは帰宅後も静養を続けました。トシは大学の3学期を全休しましたが、成績優良であったため見込点により卒業が認められました。

一方、芥川龍之介は1919年2月に再びインフルエンザに感染し、手紙で友人知人に知らせています。床につきながら俳句などをつくっています。

1919(大正8)年 (27歳)の手紙

2月20日 薄田淳介宛

其後間もなく又インフルエンザにかゝり床に就いておます但し熱はいくらもないので大した事もあるまいと思ひますそれでこの手紙を書くのが大分遅れました(中略)病氣の為新小説へ書きかけた短編も途中で御免を蒙りました床の上で俳句を作つたり絶句を作つたりしてゐますその一つ

怪しむやたまぐれ来る菊人形

2月22日 岡榮一郎(1891-1966、劇作家、評論家)宛

朶雲奉誦して久しくなるが僕は御多分に洩れず風にて田端にねてゐる次第 少しばかりの熱がとれず甚不愉快なり

久米病み江口病み僕病み我々連中方なしですな

傳染を惧れなければ遊びに来給へ熱は三十六度九分位

寝ながらの句二つ三つ

胸中の風咳となりにけり

二つ三つと書いたが一つであとが出なくなつた 頓首

手紙の冒頭の「朶雲奉誦」は難しい言葉ですが、他人の手紙を尊敬して読ませていただくとの意味と思われます。「久米病み江口病み」の久米は親友の小説家・劇作家・俳人の久米正雄(1891-1952)、江口は小説家の江口渙(1887-1975)のことで、この二人と龍之介もスペイン風邪に感染したようです。微熱程度だが熱は引かず苦しくまだ床にいるが、感染を怖れなければ遊びに来てもいいよとちょっと無責任なことを書いています。

次の手紙でも、まだ熱があるため寝ているが、もう辟易したと訴えています。また、小島政二郎もスペイン風邪に感染したようで、どれくらい寝ていたかを伺っています。龍之介はヘビースモーカであったので、そのため咽喉をこわして弱っているとも訴えています。

2月22日 小島政二郎宛

僕はまだねてゐるんだから好い加減辟易しまひました君は何日位ねましたかどうも僕のはたちが悪いんぢやないかと思つて大いに神経を悩ませてゐます尤も熱は餘りないから床の上で大分書物を読みました(中略)久米も江口も大分好い由菊池から聞きました

2月26日 松岡讓宛

ふだんの煙草が祟つてのどをこはして弱つた その爲少し計りの熱がとれないで困る もう寝てゐるのに飽き飽きした 御見舞御礼まで 頓首
春日既に幾日ぬらせし庭の松

龍之介がスペイン風邪に苦しんでいることが同僚などに広く知られるようになり、様々な分野の人々からお見舞い状が届きます。その度毎に、俳句を創り送っています。

2月26日 佐野慶造(1884-1937、海軍機関学校時代の同僚の物理担当教授)と花子(1895-1961、慶造の妻)宛

御見舞難有うございます日頃煙草をのみすぎた事が祟つて咽喉を害し甚困却して居りますしかしもう大分よろしい方ですから乍憚御休神下さい
病聞やいつか春日も庭の松

2月28日 片山廣子(1878-1957、歌人、随筆家、翻訳家)宛

御見舞下すつて難有う存じます私の方はもう二三日中に床をはなれられさうですがそちらの御病氣は如何ですか氣候不順の際異も御大事になさい私の方からも御禮旁々御見舞まで 頓首

即景

時雨れんとす椎の葉暗く朝焼けて

3月12日 豊田實(1885-1972、英語学者、英文学者)宛

目下インフルエンザの豫後で甚だ心細い生き方をしてゐます

即興

思へ君庵の梅花を病む我を

手紙には残されていないようですが、父新原敏三がスペイン風邪に感染して東京病院に入院していましたが、3月15日に亡くなりました。龍之介は3日間看病に立ち合い、父に寄り添っていたことが知られています。自らも罹患し、その上父を亡くした龍之介の深い悲しみには想像を絶するものがあつたと思います。その後、龍之介の手紙にはスペイン風邪についての記載は無くなっています。次第に、健康を回復したようです。

しかし、年が明けた1920年の1月に三度目となるインフルエンザに感染して寝込んでしまい、頭痛・腰痛・咽痛に悩んでいると知らせています。この時期は、第2波の感染拡大時(1919年8月から1920年の7月まで)でした。手紙には、「血清注射」をして肺炎になることは避けたいと書かれています。

1920(大正9)年(28歳)の手紙

1月17日 中戸川吉二(1896-1942、小説家)宛

高著を頂き難有う君はインフルエンザにて入院中の由僕もインフルエンザで寝てゐる始末だ精々癒ろつこの競争をしよう

1月18日 牧雄吉宛

目下インフルエンザにて頭痛腰痛、咽痛交々加はり居る次第 玉稿も床の上にて拝見したれど詳しい事は申上げる事勇氣も出ず(中略)只今血清注射をなしたるところまづ肺炎になる事だけは免れ得べき乎 頓首

1月19日 江口渙宛

とうとう流行性感冒に罹つて寝てゐる頭痛腰痛咽痛交々加はつて閉口だ(中略)二伸 寝てゐると落着いた氣になるのは難有いこの二三日うんうん云ひながらも何處か娑婆を離れた長閑さを味つた

1月20日 友常幸一(1896-?、歌人)宛

過日は羊羹難有う まだ御禮状も上げない内に流行性感冒に罹り未だに床を離れ

ませんこの手紙も寝ながら書いて上げるのです(中略)

原稿は同封で御返します頭痛腰痛咽痛等交々加はつて苦しいからこれで擱筆
します 頓首

1 月 29 日 長尾武男宛

現在私はインフルエンザで床に就いてゐますこの手紙も床の上で書きました読み
にくい所は御推讀下さい最後に私はあなたの考へているような偉い人間でもなん
でもないといふ事を申し上げます

この手紙は、小説家になりたい人物から原稿が送られてきて、床に伏せながら読
み、返事を書いたようです。龍之介の親切心も伝わってきます。

このころ小説家・童話作家の小川未明(1882-1961)の一家4人が流行性感
冒に罹り、一時危篤状態にもなりました。後輩の木村毅(1894-1979、文学評論
家・小説家)が見かねて、未明の友人たちと相談して、印税収入を未明に贈るアンソ
ロジーを新潮社から出版することにしました。未明と親しくなかった作家も含め正宗白
鳥、芥川龍之介、菊池寛らが賛同して『十六集』が1920年(大正9年)2月に刊行
されました。こうして、未明とその家族は病氣と貧苦から脱することができたという美
談も、スペイン風邪流行当時に残されています。

3 月 15 日 瀧田哲太郎(1882-1925、雑誌「中央公論」の編集長)宛

病人家内にあり且亡父の一周忌の命日や蓮夜にて毎日俗用多く原稿涉取らず恐
縮致し候

3 月 31 日 恒藤恭(1888-1967、法哲学者、龍之介の親友の一人)宛

二伸 その後御無沙汰した 僕病氣勝ちで困る 風なども去秋から殆ど引き續け
だ

この後は、龍之介はスペイン風邪から解放されたようで、手紙には書かれていま
せんが、歌人の斎藤茂吉がスペイン風邪に罹ったことを知り、気になって手紙を送っ
ています。

7 月 8 日 齋藤茂吉(1882-1853、歌人、精神科医)宛

今月のアララギを読み御病氣の由承知氣になり候まゝこの状認め候 御容態如何
に候や時節がら御大事になされ度候御職業がら御手落ちは無之事と在候念の爲
申添へ候

この頃のうん氣にて小説家業もつらく僅に夜涼を迎へては息をつき居り候

押し照れる月夜静けみ動かざる簾の上に馬蠅一つ

歌のやうなもの御一笑下され度候 早々

この年の1月6日、長崎医学専門学校教授と県立長崎病院精神科部長であった斎藤茂吉は義弟が長崎を訪れたので、妻てる子と長男茂太と共に晩餐をとり楽しく過ごしましたが、帰宅後茂吉がスペイン風邪に罹り、急激に発熱し、寝込んでしまいました。肺炎を併発し、4～5日間は生死をさまよひ、一時は生命を危ぶむ状況にありました。てる子と茂太も罹りましたが、比較的軽微ですぐに回復しました。茂吉は50日近くも治療と療養に費やしたそうです。長崎医学専門学校では、茂吉の同僚の大西進教授も感染し、校長の尾中守三教授は死亡しました。クラスターが病院内で発生したようです。茂吉は次の歌を詠んでいます。

はやりかぜ一年おそれ過ぎ来しが吾は臥りて現ともなし

「臥りて」は病気で寝ることで、「現ともなし」は生きているのかどうかもわからない状況ということです。

2020年の春頃から始まった新型コロナウイルス感染は大変な被害をもたらしましたが、約100年前のスペイン風邪感染拡大当時はまだワクチン、酸素吸入器や人工肺とポンプを用いる体外循環回路による治療法(ECMO)もなく、治療の見通しができない混沌たる世界ではなかったかと想像されます。芥川龍之介は1918～1920年の間に3度も感染し、かなり厳しい症状を克服して生き延び、懸命に創作活動を続けましたが、7年後に亡くなりました。最後の作品は『続西方の人』でした。

最後に、龍之介の残した言葉のひとつを贈ります。

人生を幸福にする為には、日常の瑣事を愛さなければならぬ。雲の光り、竹の戦そよぎ、群雀むらすめの声、行人の顔、——あらゆる日常の瑣事の中に無上の甘露味を感じなければならぬ。
(『侏儒の言葉』『瑣事』より)

2020年から世界的に流行した新型コロナウイルス感染が拡大した状況の中で、これまで意識しなかった日常性がいかに貴重なことであったかを世界のすべての人々が実感意識したことでしょう。

[参考]

- 1) 『芥川龍之介全集』第10, 11巻、1978年、岩波書店。
- 2) 『侏儒の言葉・西方の人』1968年、新潮文庫、新潮社。

桜井 弘